実践報告

2023年度におけるスチューデント・インターンシップ活動報告

北 川 浩 子

要　旨

スチューデント・インターンシップは坂戸市内の小・中学校おける児童・生徒へのきめ細やかな指導に対する教師の補助を行うと共に，これからの学校教育を担う，情熱を持った教師の育成に資することを目的として行われている。2023年度，経済学部１名，現代政策学部１名，理学部化学科２名，理学部数学科22名の計26名の学生が小学校５校と中学校５校に配置された。様々な体験を通して教員の仕事の大変さと大切さを学び，現職の先生方との交流から先生方の教員としての考え方や生徒への愛情等を身近に感じることによって，学生が教育への考え方を明確にし，教員になるという意欲の向上につながっていることを示した。

キーワード：学校インターンシップ，教員養成，資質向上，アクティブラーニング

１．はじめに

学校インターンシップや学校ボランティアなどの取組みについては，「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い，高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～」答申（平成27年12月21日，中央教育審議会）において「学生が長期間にわたり継続的に学校現場等で体験的な活動を行うことで，学校現場をより深く知ることができ，既存の教育実習と相まって，理論と実践の往還による実践的指導力の基礎の育成に有効である。また，学生がこれからの教員に求められる資質を理解し，自らの教員としての適格性を把握するための機会としても有意義であると考える。」と提言されている。また，学校インターンシップの実施については既存の教育実習との間で役割分担の明確化を図るとともに，その円滑かつ確実な実施に向けて，受入れ校の確保や実施内容の検討等のための教育委員会や学校と大学との連携体制の構築，大学による学生に対する事前及び事後の指導の適切な実施，学生側と受入れ校側のニーズやメリットを把握するための情報提供の実施など，環境整備について十分に検討することが必要であることから，教職課程での位置付けは各大学の判断により委ねられた。それにより，今日では学校ボランティアや学校インターンシップへの取組みが多くの教員養成大学で様々な形態で行われている。城西大学では2006年から理学部で，2020年度からは教職課程をもつ全学部で実施している。

さらに，中央教育審議会は「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す，個別最適な学びと，協働的な学びの実現～答申（令和３年１月26日）において「令和の日本型学校教育」の在り方を定義した。それを実現するために「GIGAスクール構想」及び「少人数によるきめ細かな指導体制」の整備を進め，今後は「教職員の養成・採用・研修等の在り方」が更に検討を要する事項としている。それをうけ，令和４年12月19日に公表された『令和の日

本型学校教育』を担う教師の養成・採用・研修等の在り方について～「新たな教師の学びの姿」の実現と，多様な専門性を有する質の高い教職員集団の形成～答申（2021年，中央教育審議会）において「令和の日本型学校教育」を担う教師に求められる資質能力の中で，「教育実習」等の在り方の見直しが考えられている。その見直し案として通年で決まった曜日などに実施する教育実習や，早い段階から「学校体験活動」を経験し，教育実習の一部と代替する方法を示している。埼玉県教育委員会は2023年度に新規事業として「彩の国かがやき教師塾」を立ち上げており，この事業は「優れた教員の確保のため，教員という職業の魅力を大学生に伝え，埼玉教育の未来を担う教員として活躍する人材を県教育委員会と大学とで連携して育成する。」を目的としている。２つのプログラム（ベーシックコース，マスターコース）によって構成されており，ベーシックコースは「学校体験活動」となっている。この様なことからも「学校体験活動」の組織的な取組みは重要であることが示されている。

今年度は26名の学生が教育現場を体験し，彼らがどのようなことを学び，考え，何を習得したのかなどを示し，スチューデント・インターンシップのあり方や意義について考察する。

２．スチューデント・インターンシップの実施について

2023年度のスチューデント・インターンシップは各学年で行われる教職履修者オリエンテーションで目的ややりがい，年間スケジュール等のガイダンスを行った。さらに応募する学生には本人の大学での時間割を組んだのち，原則的に毎週１回，教科は問わないが授業をしている教室に２時限以上入ることができる学校を選択するように指導した。チームスによる情報共有の徹底を行うと同時に，相談には早い対応ができるようにチャットを用いて行った。４月の最終週には「活動の手引き」をもとに坂戸市教育委員会によるガイダンスが行われた。表１に示すように小学校５校と中学校５校に配置され，配置校での学生との打合せにより，年間スケジュール等を調整する。調整の中で学生の教員免許科目を中心に様々な科目の授業や特別支援学級，またイベントへも参加などいろいろな体験ができるように工夫していただいている。今年度は大学が半期15コマから13コマになったことから講義期間が短くなり，実習期間が５月連休明け～12月までと年内に短縮された（昨年度までは１月の試験期間前まで）ことから回数が確保できるか懸念されたが，表２に示すように文系，理系を問わずその回数は昨年度（北川，2022）よりも増えた。また，今年度は数学科３年生の履修者が増え，回数は２年生と変わらないが時間数が倍になっている。これは３年生が時間割に余裕があると考えることもできるが，２年生では専門教科に加え教職科目の履修科目数が増えることからインターンシップに行く時間が制限されている傾向にあると思われる。今後教職科目の配当学年の見直しを提案していきたい。

３．スチューデント・インターンシップ活動について

３．１　日誌による活動報告

スチューデント・インターンシップでの活動内容を日誌に記載し，春学期終了後と秋学期終了後に提出させている。形式は教育実習日誌とほぼ同じであり，１回ごとに記載するようにしている。「指導教諭の批評」の欄があることから，先生方から励ましの言葉や教育に対する考え方などのコメントをいただいている。その例をいくつか紹介する。

・中学校の技術の時間に行う発表会の練習を見て

表１　スチューデント・インターンシップ受入れ校とその人数

	経済学部	現代政策学部 社会経済 システム学科	理学部 数学科	理学部 化学科	合計
坂戸小学校		1			1
大家小学校			3		3
城山小学校			4		4
桜小学校			2		2
入西小学校			1		1
坂戸中学校			2		2
城山中学校			4	2	6
千代田中学校			2		2
浅羽野中学校	1		3		4
桜中学校			1		1
合計	1	1	22	2	26

表２　活動回数及び時間について

	文系学部	理系学部	
		２年	３年
平均回数	30	22	22
平均時間	61	66	129

ほしいと生徒から頼まれ，発表を聞きアドバイスをするという内容のことが書かれた日誌には「坂戸市では子供の良いところを認めて褒めて伸ばす指導を行っています。子供達も安心して発表ができたと思います。たくさん褒めてあげて下さい。」というコメントをいただいている。この日誌は12月に書かれており，インターンシップに行って８ヶ月ほどたっている。週に１回かもしれないがコンスタントに通うことによりインターンシップ生と生徒の間に信頼関係ができ，学生が言ったアドバイスを自信につなげて発表会に臨んだ生徒の姿が想像され，このインターンシップが教員を目指す学生のスキルアップにつながっていることを感じた。

・小学校の算数の時間に式を工夫して示している児童に対して，様々な声がけをしたことが書かれた日誌には「子供達に対する声掛けは支援するために必要なことです。他に方法はあるかなと言う声掛けはとても良いので，是非ひき続きお願いします。」というコメントをいただいている。この学生は最初の頃児童への声掛けがうまくできないことを日誌に書いており，今回それを克服できた学生に対し，エールを送ってくれています。教育実習に行く前に児童・生徒とのコミュニケーションの取り方を学ぶことができたことより学生が成

長したことがうかがえる。

・中学校の国語の時間で，授業の進め方，生徒の取組みについて書かれた日誌には「一斉授業ではない授業で昔とは違った印象を受けたと思います。文科省は『令和の日本型学校教育』の中で‘個別最適な学びと協働的な学びを一体的に充実し主体的・対話的で深い学びの実現’するよう要望しています。今回の国語の授業はまさにそれを体現していたのではないでしょうか。」というコメントをいただいている。このように今の授業の仕方を早くから体験することができたことだけでなく，そのことがこれからの教員に必要なこと，理解していなければならないことを教示してくれている。

・小学校に１日行っている学生は１時間目から５時間目まで異なる学年の算数の授業に入り，学年によって教え方などの違いや気付きが書かれた日誌には「１日通しての実習お疲れ様でした。多くの学年に入ることで児童の発達段階の違いに応じた指導　声がけの違いに気づきましたね。児童の思考を働かせる指導法や発問の仕方のついても考えながら参観して下さい。」というコメントをいただいている。学生の気付きや学びを次のステップに導くような配慮が感じられるコメントである。１日単位で学校に関わる場合，先に示したように学年を変えて１教科に関わらせる場合と１つのクラスでいろいろな教科に関わらせる場合があり，それによって学生の学びの質に違いがあり，とてもありがたく思う。

３．２　発表会による活動報告

履修者は春学期活動終了後，秋学期活動終了後にそれぞれパワーポイントを用いた報告会を行っている。春学期報告会では，①配置校について②活動内容　③学んだこと　④春学期の課題と秋学期に向けての目標などについて，秋学期報告会では①活動内容　②学んだこと　③終えて感じたことについて，５分程度で発表している。それらの一部を下記に示す。春学期が終わったところでの発表会は一度自分を省みて今後の目標を示す場となっており，他の人も同じぐらい悩んで頑張っていることを共有することによって後期へのモチベーションアップにつなげられることを心がけている。１年間を通して活動した後の後期報告会では１年間インターンシップをやり遂げたことによって，各自が教職に対する目標をもち，今後の学生生活（勉学）をどのようにしていくかを示している。

前期報告会（７月）

〇学んだこと

・どんな些細な事でも生徒のことを褒めてあげることが大切である。

・常に生徒の目線に立ち物事を考え，生徒一人一人の違いの個性を把握し各々にとってベストな対応をする。

・自分が中学生の頃に比べてグループワークが多く，教員の一方的な授業ではなく，生徒主体の授業づくりが多かった。

・授業を進めるうえで行っている，工夫や注意点，大切にしたいことを学んだ。

・何かを教えるときにはその児童がどこまで教わっていて，どこまで理解しているかを把握する必要がある

・担任の先生が厳しくしているのには理由がある。自分が優しくしてしまうと児童の逃げ道を作ってしまう。

・仕事を効率よくやること

・ICT機器を活用した教育を取り入れていること。

〇後期に向けての目標

・より多くの児童とコミュニケーションをはかる

・言葉遣いなどを見直し，緊張感をもって活動していきたい。

・後期は，生徒と先生のコミュニケーションやク

ラス運営などにも着目したい
・秋学期の目標は児童のやる気を出させることです。

後期報告会（１月）
・前期での反省点を踏まえ，後期でのインターンシップでは生徒たちと積極的にコミュニケーションを取ることができ，より良い関係を築くことができた。
・入念に授業の準備をしている先生がおり，教師の熱意は生徒の勉強への熱量そのものなのだと感じた。
・春学期と同様，とにかく児童とのふれあいや，先生として教えることの楽しさを多く体験できる実習であった。また，学年によっての児童の成長の差や，授業においてのICTの有用性をより感じた実習であった。一年間の実習で得た知識や技術，また，体験を通して明らかになった自分の課題点をもう一度見つめ直して整理し，教育実習や将来の教育現場に活かしていきたいと思った。
・秋学期の目標である「児童のやる気を出させる」ことについて，自己評価は，“少しできた”です。具体的にはやる気のない児童に向けて，段階的に課題を提示し，ゆっくりでもいいから課題をやらせる。脱線したり，ほかの子と話をしてしまったら，それを利用し，他の子の意見を聞いてみてどう思ったかを聞き出し，やる気が維持できるようにするようにしました。
・１年間を通して，①教師という職の魅力を実感，②子どもたちと関わることで自分自身が成長できる，③今まで自分自身が学んできたことはこれから教師の職を目指していく上で繋がる，④教師になりたいとさらに思うようになった。
・生徒の実態，状況，環境等に合わせた授業計画や，板書計画などを作成することの大切さや，生徒との信頼関係の構築の重要さを改めて実感することができた。この実習全体を通して，実際に現場で行われている工夫などを見ることが出来，とても良い体験をすることができた。今後に活かしていきたい。小学校でも実習を行いたいと思った。
・5月から始まり12月まで，月日にしては約半年（回数換算で20回ほど）のインターシップを通して私は様々なことを学べたと思います。普段の講義だけではわからない様な教職の実態や現場の先生だからこそ知り得る知識や体験談など，非常に多くの経験を積むことができました。特に突然の授業中の体調不良者や嘔吐処理など想定外の事態への対応，学校行事における普段とは異なる業務内容など，非常に様々な経験を得ました。また普段の学校生活以外にも実習日誌の担任の先生からのコメントや実際の会話を通して，「私はこう考えて動いています」「ここを意識すればいいと思います」と言ったアドバイスをいくつも貰い，特に特支に関する考え方には感銘を受けました。このインターンシップで見つけた自分の良い点や改善点，ここで得た知識や経験，アドバイスは来年のインターンシップや今後の教職課程にも活かしていきたいです。

３．３　アンケートについて

坂戸市教育委員会では全ての活動が終わった段階で学生へのアンケートを実施し，翌年度の坂戸市スチューデント･インターンシップ推進委員会で協議し，改善に努めている。事前説明会などでの情報提供は十分でしたか（表３）という問には全員十分だったと回答している。昨年度が73％であったことから，今年度，チームスのチャットを使用することによって会話の履歴も把握でき声掛けもしやすくなったのが理由であると考えられる。

表３　前説明会などでの情報提供は十分でしたか。（%）

十分だった	100
不十分だった	0

表４　総合的に考えて参加して良かったと思いますか。（%）

とても良かった	73
良かった	23
どちらとも言えない	4
良くなかった	0

表５　この事業に参加して，教職に就きたいと思いましたか。（%）

ぜひ就きたい	61
就きたい	35
どちらかといえば就きたくない	4
就きたくない	0

総合的に考えて参加して良かったと思いますか（表４）とこの事業に参加して，教職に就きたいと思いましたか。（表５）は参加して良かった，教職に就きたいと96％が回答している。この数値はこの事業の目的が十分達成できたことを示している。さらに記述式の感想では，先生方や学校に対する感謝の言葉が多く記述されていたが，いくつか問題点もわかった。配置校で行われた研修会に参加した学生やミニ授業を行った学生の成績評価が上がると思った学生がいたことである。経験したことの違いで評価が変わるわけではないことを明確に示す必要があると実感した。また，「文系の学生も参加する人が増えるような呼びかけを増やしてほしい。」と要望があった。教職課程センターを通してアナウンスの方法を検討して行きたい。

2023年度もほとんどの学生が良い経験ができたと考えられる。児童・生徒だった頃に普及していなかったICT教育の方法や「主体的・対話的で深い学びの実現」のためのアクティブラーニングの仕方などを経験し，学ぶことできた。このように教育現場を体験することによる教育効果を考え，今後もより多くの学生がスチューデント･インターンシップに参加してくれるように努力していきたい。

参考文献

中央教育審議会（2015）これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い，高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～の答申
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1365665.htm

中央教育審議会（2021）「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す，個別最適な学びと，協働的な学びの実現～ 答申
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/079/sonota/1412985_00002.htm

中央教育審議会（2022）『令和の日本型学校教育』を担う教師の養成・採用・研修等の在り方について～「新たな教師の学びの姿」の実現と，多様な専門性を有する質の高い教職員集団の形成～答申
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/079/sonota/1412985_00004.htm

北川　浩子（2023）2022年度におけるスチューデント・インターンシップ活動報告. 教職センター紀要 第８号, p. 17